論 文 の 和 文 要 旨

論文題目	チャ／茶とともに生きる人びと ——転換期ミャンマーを生きる山地民の経済人類学的研究
氏名	生駒　美樹

2011年、長きにわたる軍事独裁政権から民主化に舵を切ったミャンマーでは、政治的、経済的な大転換期を迎えている。本論文の目的は、転換期の現代ミャンマー山間部で、茶生産を生業とするモン・クメール語族の少数民族パラウン人を事例に、彼らの茶生産にまつわる慣習や経済行動が、自然や社会といかに関わり合いながら形作られているのかを、文化人類学的視座から明らかにすることである。具体的には、茶生産をめぐって結ばれる経済的・社会的格差のある二者間の互酬関係に着目し、従来のパトロン＝クライアント関係の議論を再考する。

ミャンマー最大の茶産地シャン州ナムサン郡では、製茶工場、生葉代理人、農家、農業労働者など茶生産者のあいだで、《支援（パラウン語でトッ）》と呼ばれる信用貸しが行われている。《支援》とは、無利子無担保で、現金や米、食料品などを前貸しすることをいう。農家は、農業労働者を《支援》することで彼らを囲い込み、収穫時の労働力を確保する。一方、農業労働者は、収穫時に労働力を提供し、その収入で農家に負債を返済する義務を負う。同様の関係は、製茶工場と農家、製茶工場と生葉代理人、生葉代理人と農家のあいだでも結ばれている。

先行研究では、こうした関係性をパトロン=クライアント関係という枠組みで分析してきた。従来、実体主義的立場をとる文化人類学者は、経済を「社会に埋め込まれた」ものであるとし、当該社会の経済を社会関係との関わりから明らかにしようと試みてきた。しかし、筆者の調査地でみられる《支援》関係をみていくと、《支援》する側とされる側の力関係が絶えず揺れ動き、彼らの関係を社会関係のみに還元できない状況があった。

そこで、本論文では、次の二つに着目し、二者間関係の動態を明らかにする。ひとつは、脱人間主義的視座から、パトロンとクライアントの関係性を、二者間の社会関係のみに還元するのではなく、チャや自然環境を含めた様々な要素の結びつきから捉えることである。これにより、二者間の関係が、複数の異なる位相で揺れ動く様子を検討する。もうひとつは、社会的・経済的優劣ある二者間の非対称的なやりとりを、「交換（互酬性）」に還元せずに、「コミュニズム」、「交換」「ヒエラルキー」という 3 つの異なる原理［グレーバー 2016］の錯綜によってなるものと捉えることである。そして、これら諸原理の結節点として負債に着目し、負債が結びつける二者間関係がいかに揺れ動くのか検討する。また、負債を分析する際には、それが貨幣価値に数量化されているか否かにも着目する。

本論文は全 8 章からなる。第 1 章「序論」では、「社会に埋め込まれた」経済、負債、脱人間主義的民族誌に関する先行研究を概観し、問題の所在を指摘する。

第 2 章「パラウン民族とチャ／茶」では、本研究の調査地シャン州ナムサン郡に居住す

るパラウン人と茶生産の歴史について、先行研究を概観する。現在のナムサン郡一帯は、イギリス植民地化以前から、パラウン人の首長が治めるタウンバイン藩王国があり、茶生産を経済基盤とした社会であった。

第 3 章「チャとともに生きる」では、チャと人間との関わりに焦点をあてる。チャの栽培、収穫、加工までのプロセスを検討することを通じ、チャが、単に人間から収穫され、加工されるだけの受動的な存在ではなく、人間の行動を方向づけるものであることを示す。

第 4 章から第 5 章では、《支援》をめぐる人びとのミクロな関係性を検討する。第 4 章「チャ摘み労働力をめぐる関係」では、チャ摘みの労働力を集めるための二つの仕組み——労働交換と《支援》関係——を検討する。調査地では、貨幣価値に換算された負債とそうでない負債が、等しく《負債（パラウン語でラム）》と呼ばれている。労働交換では、1 日分の労働力をひとつの単位としてやりとりされる。ここでは、《負債》は貨幣価値に換算されることも、帳簿に記載されることもないが、厳密な等価交換が目指されている。また、労働交換に参加する二者間の関係は、チャ園所有の有無を問わず対等なものとされている。一方、農家と農業労働者の《支援》関係では、両者のあいだには、チャ園所有の有無に基づく経済的・社会的格差がある。《負債》は、貨幣価値に換算され、帳簿に記載されているが、等価交換が目指されることはなく、清算を行うことはない。唯一の例外は、《支援》関係を解消するときである。

次に、《支援》関係において、経済的・社会的に優位に立つはずの農家が、ときに農業労働者に対して劣位に立たされる状況に着目する。二者間の関係性を揺れ動かす要因のひとつは、チャ樹の状況に応じて生じる労働力需要の変化である。労働力の需要が高まると、農業労働者が優位になる状況が生じるのである。また、もうひとつは、労働力の価値を算出する方法がふたつ存在することである。1 日分の労働力の価値は、労働交換では等価とされるが、《支援》関係では収穫量に応じて報酬が計算されるため、日々の労働力が不等価だということが可視化されてしまう。そのため、生葉の価格が低く、収穫量が少ない時期には、農家は農業労働者に対し「負い目」を感じる状況が生じる。第 4 章では、チャの収穫をめぐる農家と農業労働者の《支援》関係が、《負債》とチャという異なる位相にみられる揺れ動きによって生み出される関係であることを示す。

第 5 章「生葉をめぐる関係」では、加工のための生葉をめぐる製茶工場、生葉代理人、農家の《支援》関係を検討する。製茶工場は、農家や生葉代理人を《支援》をしている。両者のあいだには、経済的・社会的優劣があるが、劣位にあるはずの農家や生葉代理人が、工場に対して優位に立つことがある。二者間関係が揺れ動く理由として、次の 2 点を指摘できる。第一に、生葉代の支払いに着目すると、製茶工場の方が、農家や農業労働者に対して《負債》を負っているケースがみられる。生葉をめぐっては、社会関係と負債が作り出す関係にねじれが生じる場合があり、それが二者間の関係を揺れ動かす要因になっている。第二に、生葉収穫量の変動や市場の動向、農家の選択によって生葉の需給バランスは常に変化する。生葉の需要が高まれば、それを提供できる農家と生葉代理人が優位に立つ。

また、《支援》は、必ずしも地位差がある二者間で行われるわけではなく、近所づきあいや親戚づきあいの延長上で行われることもある。これらは、親しい関係の延長で《支援》関係が結ばれるものの、この親しい社会関係は、《支援》が作りだす関係と矛盾する場合があり、《負債》の回収を困難にする。第 5 章では、《支援》関係が、生葉の収穫量の変動、市場の動向、農家の選択など、社会関係とは別の位相で揺れ動く様子を示す。ただし、地位差がない二者間の《支援》関係では、親しい社会関係がより強く働くことを指摘する。

第 6 章「加工品をめぐる関係」では、加工品としての茶をめぐる生産者と流通業者、消費者の関係を検討する。そして、近年の消費市場の変化が、ナムサン郡の生産者に大きな影響を及ぼしていることを指摘する。ナムサン郡産の茶は、流通業者から最高級品として認識され、消費者からも人気が高かったが、2000 年代以降、中国の CTC 発酵茶とピンダヤ産の後発酵茶の人気が徐々に高まっていった。この背景には、流通と消費スタイルの変化がある。その結果、ナムサン郡では、2013 年に、深刻な茶業不振が表面化した。これまで、ナムサン郡の生産者は、市場の需要に合わせて加工する茶の種類を選択することで、生産活動を安定させてきた。しかし、こうした生産者の個別の対応では立て直せないほどの不振に陥り、生産者は対応に迫られている。

第 7 章「《支援》関係の終焉」では、チャ摘み労働力をめぐる《支援》関係が、茶生産をめぐるより広い社会的文脈のなかで、いかに変化してきたのか検討する。そして、第 6 章で指摘した茶業不振と、近年急増した出稼ぎ労働による労働者不足が、農家と農業労働者の《支援》関係に影響を及ぼしていることを指摘する。P 村では、労働力の需要と供給のバランスが変化するたびに、チャ摘みの報酬制度が変化してきた。農家は、収穫時に必要な農業労働者を囲い込むために、《支援》関係におけるチャ摘み報酬制度の見直しを行ってきた。

第 8 章では、本論文の結論を述べる。第一に、《支援》関係にみられる二者間の関係は、経済的・社会的優劣ある社会関係に還元することはできないということである。労働力、生葉、加工品をめぐる需要の変化が、二者間の力関係を揺れ動かす。この需要の変化は、植物としてのチャ、自然環境、生産者の選択、消費や流通スタイルの変化、出稼ぎ労働の増加など、二者間の社会関係とは異なる位相で生じている。そして、こうした要素が複合的に関わり合うことで、二者間関係は揺れ動いている。従来のパトロン＝クライアント関係の議論は、経済的・社会的優劣ある社会関係に着目したものであったが、それはパトロン＝クライアント関係を成り立たせている一つの要素にすぎない。第二に、《支援》関係は、「交換」の原理を基盤としつつ、ときに「コミュニズム」や「ヒエラルキー」の原理が支配的になることによって、揺れ動いているということである。「コミュニズム」が支配的になるか、「ヒエラルキー」が支配的になるかは、負債の状況だけでなく二者間の社会関係の影響がある。